HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	後庭花 ： 明末清初のポルノグラフィーにおける男色の表象
Author(s)	陳, 恵陽
Citation	研究論集, 24, 115（左）-136（左）
Issue Date	2025-01-24
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.24.l115
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94029
Type	departmental bulletin paper
File Information	08_rjgshhs_24_p115-136_l.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/rjgshhs.24.l 115

後庭花

── 明末清初のポルノグラフィーにおける男色の表象 ──

陳　　恵陽

要　旨

明清時期のポルノグラフィーにおいて,「後庭花」は男色の隠語として多用されていた。しかし，具体的に「肛門」または「肛門交」なる行為を指すこの語彙は，必ずしも男性に限って用いられるものではない。

小論は明末清初に刊行されたポルノグラフィーの作品群を取り上げ,「後庭花」を手がかりに，肛門交に関する描写に注目し，作品における異なるアプローチを分析し，男色の扱われ方を考察する。後半では，清代初期の刊行と想定される二つの小説『桃花影』と『春灯鬧』を取り上げ，そのやや特殊な男色の描き方を緻密に読み解き，男色描写がいかにジェンダーの越境と抑圧につながるのかについて考察する。

はじめに

中国では，古くから男性の美しさは女性の美しさに匹敵し，男性の性的欲望の自然かつ正当な対象を構成することを認めている。『史記』,『漢書』をはじめとする正史では「佞幸」と見なされる人物の伝記を収録している。『史記』「太史公自序」では,「夫事人君能說主耳目，和主顏色，而獲親近，非獨色愛，能亦各有所長（そもそも君主に仕えて，君主の耳目を喜ばせ，君主の顔色を和らげて，君主の寵幸を得た者たちは，美貌だけで寵愛されたのではなく，それぞれ才能においてもすぐれたところがあったからである）」と「佞幸」を解釈している[1]。「佞幸」には，美貌を売り物にして媚びへつらい，皇帝の恩寵を受ける人物がいることが確認できる。『漢書』「佞幸伝第六十三」では「柔曼之傾意，非獨女德，蓋亦有男色焉（柔らかく，つやのある肌

[1] ［漢］司馬遷撰，［宋］裴駰集解［唐］司馬貞索隠［唐］張守節正義『史記』十（中華書局，1973 年），「太史公自序」3318 頁。

が人の心を傾けるのは，女徳〔女の性情，女色〕に限っているのでなく，男色にもある）」と女色と拮抗し得る男色の威力および危険性を説いている[2]。『史記』と『漢書』の「佞幸伝」には，後世において男色の代表格と見なされている漢文帝の寵臣である鄧通，漢哀帝の寵臣である董賢などの伝が収録されいる。

このように，男色の文化が盛んであった古代中国社会において，男色にまつわる逸話や物語，専門用語は枚挙にいとまがない。男色の隠語ないし美称について，正史に記されている由緒正しいものもあれば，通俗文芸に多用されている俗語もあり，実に豊富である。漢哀帝と董賢の故事に由来する「断袖」は，前者の代表的なものである。『漢書』「佞幸伝第六十三」によれば，董賢との昼寝から目覚めた哀帝が，帝の衣の袖の上に寝ていた董賢を起こさないように袖を切り落として起きたという[3]。その後，「断袖」は男色の代名詞になった。歴史上の男色エピソードを集めた清代の小説集は『断袖篇』と名付けられた。アメリカの学者ブレット・ヒンシュ（1990）の中国の男色史についての専著のタイトルが「passions of the cut sleeve」になっているのは，「断袖」の直訳である[4]。

小論が取り扱う「後庭花（こうていか）」は，明清時期の通俗文芸において，男色の隠語として多用されていた語彙である。澤田瑞穂（1995）は，中国の男性同性愛について論じた文のタイトルを「後庭花史談」としている[5]。「後庭（こうてい）」とは，元々後宮あるいは邸宅の奥の庭のことである。「後庭花」と言えば，後宮の美女の意となり，さらに文学史的にはあるメロディーの名でもある。最初は陳の後主（陳叔宝，在位 582–589 年）の作曲による楽府「玉樹後庭花」を指し，後に詞牌や曲牌にもなった。張傑（2008）は明清時期のポルノグラフィーにおける同性愛の語彙について，「後庭，本來是指帝王的後宮，引申開來，可以指臀部肛部（後庭は元々帝王の後宮を指し，派生して「臀部」または「肛門」の意味もある）」「後庭也稱後庭花（後庭は後庭花とも呼ばれる）」と「後庭花」を説明した[6]。中野美代子（2001）は次のように述べている。「こんな，まことに文学的なことばが，おそらく明のころから，男色（ホモ）を指すようになったのは，字づらからしてやむをえないことだったかもしれない」[7]。

明清時期の用例を考察すると，「後庭花」は男色の隠語のほかに，具体的に人体の部位としての「肛門」または「肛門交」という行為を指す。この場合，必ずしも男性が持っているもの，

2　［漢］班固撰，［唐］顔師古注『漢書』十一（中華書局，1975 年），「佞幸伝第六十三」，3741 頁。

3　前掲『漢書』十一「佞幸伝第六十三」，3733 頁。

4　Bret Hinsch. *Passions of the Cut Sleeve: The Male Homosexual Tradition in China.*（University of California Press, 1990）.

5　澤田瑞穂「後庭花史談」，初出は『文学』季刊第六巻第一号（岩波書店，1995），澤田瑞穂『中国史談集』（早稲田大学出版社，2000）所収。

6　張傑『趣味考据 —— 中国古代同性恋図考』（雲南人民出版社，2008），223 頁。

7　中野美代子『肉麻図譜 —— 中国春画論序説』（作品社，2001），173 頁。

あるいは男性を対象におこなうことではないだろう。実際に，ポルノグラフィーとしてつとに名高い『金瓶梅』[8]において「後庭花」が用いられた人物三人のうち，二人が女性である。『金瓶梅』にいち早く注釈をつけた姚霊犀（1940）は，「後庭花」について，「本陳後主所度曲，名玉樹後庭花，後世借謂男女之餘竅，梵典所謂非道行婬也（元々は陳の後主が作った曲であり，「玉樹後庭花」と名付ける。後世は借りて男女の余竅を指し，仏典のいわゆる非道行婬である）」と説明した[9]。「後庭花」が男に限らず，女〔肛門〕との肛門交でも使われることは明らかであろう。

「後庭花」は一見男色の色合いが濃い語彙であるが，その意味合い・使い方は多様性に富んでいる。小論では，明末清初に刊行されたポルノグラフィーの作品群を取り上げ，「後庭花」を手がかりに，「肛門交」という性行為がいかに表象されているか，どのような性意識を表しているか，またどのように変容していくかについて考察してみたい。

先行研究

中国の男色文化については，これまでに多くの先行研究が蓄積されている。王書奴『中国娼妓史』（上海生活書店，1934 初版）は男娼の歴史を時代ごとに詳述し，多くの資料を提示した。潘光旦は 1939 年から 1941 年にかけてハブロック・エリスの『性の心理』を中国語に訳し，1946 年に出版した（中国語タイトル『性心理学』，重慶商務印書館，1946 初版）。さらに附録として，中国の文献資料から同性愛に関するエピソードをまとめた一篇「中国文献中同性恋挙例」を加えた。オランダの外交官，東洋学者のロバート・ファン・フーリック『秘戯図考』（自費出版，1951），『中国古代房内考』（Leiden: E.J. Brill, 1961）では，男色を含む古代中国の性風習，性意識やエロティックな文学および絵画を広く論じている。

1990 年代以降，文化や文学の視点から男色を取り扱う著書，論文が多くなり，多大な研究成果があげられている。先述したブレット・ヒンシュの *Passions of the Cut Sleeve: The Male Homosexual Tradition in China*（University of California Press, 1990），呉存存『明清社会性愛風気』（人民文学出版社，2001），張在舟『曖昧的歴程 ── 中国古代同性恋史』（中舟古籍出版社，2001）などは，社会史的背景を踏まえつつ，中国古代における性および男色の基本構造を明らかにした。これらの研究をまとめると，性交において，挿入する／挿入されることは，ジェンダーにつながり，男性／女性とイコールのような関係になり，家父長制の権力構造を表している。男

[8] 『金瓶梅』には主に二つの系統がある。「詞話」の形を取り，万暦丁巳（四十五年，1617）の序を持つ『金瓶梅詞話』と，明代崇禎年間（1628–44）の刊刻と推定され，本文に簡単な批評と挿絵二百枚を加えた「崇禎本」または「繡像本」である。とくに断りがないかぎり，小論は詞話本のテキストを使用する。

[9] 姚霊犀『瓶外卮言』「金瓶小札」（天津人民出版社，2012），1940 初版の影印本，192 頁。

色行為は同様にこのフォーミュラにあてはめられ，基本的には陰茎を中心として，挿入する／挿入されるに分かれる。そして，この双方に分かれることは，年齢・地位・階層などさまざまな面における等級差を示している。

男色の隆盛を迎えた明清時期に焦点を当てた研究もまた数多くある。呉存存の *Homoerotic Sensibilities in Late Imperial China*（RoutledgeCurzon, 2004）は明末から清代にかけて，文人階層における男色への嗜好を分析し，行為やアイデンティティの視点のほかに，男色という現象を文化の視野におさめて検討するべきだと指摘した。明清時期のポルノグラフィーにおける男色の表象に関して，ジョバンニ・ヴィティエッロの *The Libertine's Friend: Homosexuality and Masculinity in Late Imperial China*（The University of Chicago Press, 2011）は有益な示唆に富んだ専著である。ヴィティエッロ氏は明清時期の小説に登場した男性の人物像を，侠義精神に富んだ「侠士」，ロマンティックな「学者」，性的遍歴を体験する「浪子」に分類し，つながりおよびそれぞれの変容を論じ，ホモソーシャルとホモセクシュアルの複雑な関連性や，男性性のイデオロギーの変化を考察した。

既存の文献資料の多くは知識層の生活を描写する傾向があり，どの階層の性文化を描いても，つねに知識層の価値観によって色付けされていることは想像に難しくない。下層民衆の性意識を考察するためには，法的な事例を視野におさめたほうが有益である。マシュー・ソマーの *Sex, Law, and Society in Late Imperial China*（Stanford University Press, 2000）は，清代前期から中期にかけての性犯罪の判例を取り上げ，とくに雍正時期（1723–35）において，男同士の性行為や売春を犯罪とするなどの新法律の導入により，伝統的なジェンダーイデオロギーを強化しようとする清代の試みを考察した。

このように，先行研究が提示した男色の基本構造や，社会，文化との関係性を確認した上で，小論は「後庭花」の美称を持つ「肛門交」という性行為に注目し，作品における異なるアプローチを分析し，男色の扱われ方を考察する。後半では，清代初期の刊行と想定される二つの小説『桃花影』と『春灯鬧』を取り上げ，そのやや特殊な男色の描き方を緻密に読み解き，同性間の性描写がいかにジェンダーの越境と抑圧につながるのかについて考察する。

一　「翰林風」と「後庭宴」

すでに紹介したオランダの外交官ロバート・ファン・フーリックは，早い段階で中国のエロティックな文学および絵画に目を向けた研究者の一人である。『秘戯図考』に収録されているフーリックの中国語で書いた序文によれば，彼は日本でいくつかの明代刊行の房中書および春画冊を見つけた。その中で，万暦（1573–1620）の刊行と推測される彩色春画冊『花営錦陣（かえいきんじん）』の版木は，とくに貴重なものである。研究者に資料を提供することを目的として，彼は 1951 年に自費で『秘戯図考』を五十部出版した。この専著は上・中・下の三冊からなり，上編は漢代か

ら明代までの房中術の概略および春画の歴史の紹介；中編は房中書やポルノグラフィーの抄本『秘書十種』；下編は『花営錦陣』のモノクロ複製である[10]。

彩色木版画冊『花営錦陣』は二十四枚の絵を収録しており，絵の裏面には一首の詩詞が付されている。第四枚の絵には，「翰林風（学者ぶりのお楽しみ）」と題する詩がついている。

翰林風

座上香盈果滿車，誰家年少潤無瑕。為探薔薇顔色媚，賺來試折後庭花。半似含羞半推脫，不比尋常浪風月。回頭低喚快些兒，叮寧休與他人說。

南國學士

彼の座席には香りが漂っており，馬車には果物がいっぱい。麗しく，きずのないこの若君は誰であろうか。美しいバラを摘むために，彼を誘惑してその後庭花を試させてもらった。彼はすこし恥ずかしがりながら，やさしく相手を押しのける。これは並の戯れではない。彼は振り返ってこう呼びかけた。「はやくして！他の人には言わないで」と[11]。

図一　「翰林風」

---

[10] R. H. Van Gulic, *Erotic Colour Prints of the Ming Period: with An Essay on Chinese Sex Life from the Han to the Ch'ing Dynasty, B.C. 206 -A.D. 1644*.（Privately Published in Fifty Copies: Tokyo, 1951）.

[11] フーリック氏の英語訳は以下のとおりである。

The Way of the Academicians

Surrounded by a lingering fragrance, and so handsome as to make the ladies pelt him with fruit till his carriage is full, who is that gentleman of dignified mien? In order to explore the Charm of the Rose he has inveigled his partner into allowing him to try the Flower of the Hindgarden.

この絵について，フーリック氏は「A shadowy courtyard corner. On the table, covered with a mat, a book and a rolled up scroll. The man, wearing an official cap, has lowered his trousers; those of the girl are lying on the table. One of the girl's boots has slipped off（薄暗い中庭の片隅。マットに覆われたテーブルの上には，本一部，巻かれた巻物一巻が置かれている。役人の冠をかぶった男はズボンを下ろしており，少女のズボンはテーブルの上に置かれている。少女の長靴の片方が脱げている）」と絵解きする[12]。

さらに，詩の最初の句には二人の有名な美男子の典故が含まれており，それぞれ荀粲（荀彧の誤り）と潘岳のことであると説明した。タイトルの「翰林」について，「"Forest of Writing Brushes" was the Imperial Academy of Letters. Its members often practiced pederasty and hence were also supposed to be prone to the anal coitus when copulating with women（翰林〔Forest of Writing Brushes〕とは御用文学院のことである。そのメンバーはしばしば少年愛をおこなうので，女性との性交でも肛門交をする傾向があるとされている）」という注釈をつけた[13]。「Forest of Writing Brushes」とは「翰林」の直訳であり，「翰林」とは明清時期，詔勅の起草・史書の編纂などをつかさどる役所「翰林院」の役人のことである。

しかし，フーリックのこの解釈に対して，異議を唱える研究者が多い。例えば，呉存存（2004）は，先述の詩および絵は若い男性（年少）との性交を描いていると主張する。フーリックは男色のヒントを読み取れたにもかかわらず，それを異性間の性行為と解釈した。それは彼が同性愛などのような，道徳的中傷と受け取られる可能性のあるものから中国を守る傾向に関連するかもしれないと，呉は論じた[14]。また，中野美代子は，明代の春画では女の纏足をアピールする

She is a little bashful and gently pushes him away, for this is quite a departure from the ordinary! Looking over her shoulder she calls out softly: 'Hurry a bit! And please don't say anything to the others!'

The Candidate from the South

前掲 *Erotic Colour Prints of the Ming Period*, p. 212.

12 前掲 *Erotic Colour Prints of the Ming Period*, p. 211.

13 前掲 *Erotic Colour Prints of the Ming Period*, p. 212.

14 呉存存 *Homoerotic Sensibilities in Late Imperial China.*（RoutledgeCurzon, 2004）, Introduction, p.39, and Introduction Note 65, pp.247-248.「翰林風」について，呉存存の英語訳は以下のとおりである。詩に登場するすべての人物を男性にしている。

Academicians' Mode
His seat is fragrant, his carriage filled with fruit,
Whose lad is this, cheeks rosy and so smooth?
So I may appreciate this sweet rose all the better,
I lure him into letting me pluck his rear court flower.

A little bashful but only half opposed,
This is not your common dalliance.
He turns around, calling out to hurry up,

ことが一般的であると確認した上で，わざと一つの足をむきだしにしたのは，「後庭花」を攻められるのは男であることをほのめかすのだと指摘した[15]。

呉氏が指摘したとおり，「翰林風」という詩には男色のヒントが散りばめられている。「翰林風」の出典は，宋代の欧陽修の「贈王介甫」の一聯「翰林風月三千首，吏部文章五百年」である[16]。「翰林」は唐代の詩人李白，「風月」は詩を指す。しかし，明清時期のポルノグラフィーにおいて，「翰林風月」はすでに男色行為を指すようになった。明末の小説『石点頭』巻十四では，異なる階層や地域における男色の別称を列挙している。その中に，「讀書人的總題叫做翰林風月（読書人〔の間の男色行為〕は一括して翰林風月と呼ぶ）」とある[17]。

また，署名の「南国学士」について，明代において南方地域は男色が盛行していたと思われる。さらに，「南」は「男」と掛けて男色を表す説がある。男色の別称として「男風」や「南風」が多用されている。『金瓶梅』第四十九回，主人公の西門慶は新たに「巡鹽御史」に任ぜられた蔡状元を接待するために，妓女二人を招き，「他南人的營生，好的是南風，你每休要扭手扭腳的（あのかたは南の人だ。南方人のお気に入りは南風だぞ。おまえたちはもじもじして，いやな顔をするなよ）」と冗談まじりに言い含める[18]。この絵では男同士の間におこなう「後庭花（肛門交をする）」という行為を描いていることが確認できるであろう。

しかし，先述したとおり，肛門を指すこの「後庭花」または「後庭」が，男に限らず女においても用いられることは，容易に納得できるであろう。『花営錦陣』ではまた，「後庭宴」と題する詞のついている絵一葉が収録されている。こちらのほうでは，肛門交をおこなっている男女二人が描かれている。「美人兀自更多情，番做箇翰林風月（美人はさらに多情であり，かえって翰林風月をする）」という一文から，男同士の「翰林風月」すなわち肛門交をおこなう美人といった趣向が見いだせる[19]。ここでは，肛門交は男色と密接なつながりを持つ行為であることを逆説的に裏付けている。

明代万暦二十五年（1597）ころの成立と推定される『繡榻野史』では，節が分けられ，一節

And pleads for me to never say a word.

15 前掲『肉麻図譜 ── 中国春画論序説』，166–170 頁。

16 ［宋］欧陽修著，李逸安点校『欧陽修全集』（中華書局，2001），巻五十七「居士外集巻七」，813 頁。

17 ［明］天然痴叟『石点頭』（古本小説集成，上海古籍出版社，1994），第十四巻「潘文子契合鴛鴦塚」，916 頁。

18 詞話本のテキストは，『金瓶梅詞話　万暦本』（聯経出版事業公司　景印，1978）を使用した。翻訳は，小野忍・千田九一訳『金瓶梅』（平凡社，1972），田中智行訳『新訳　金瓶梅』上・中巻（鳥影社，2018・2021），そして David Tod Roy 訳 *The Plum in the Golden Vase*（Princeton University Press，2001）を参照した。また，武田雅哉先生（北海道大学名誉教授）のご指導をいただいた。
『金瓶梅詞話　万暦本』巻十，第四十九回，六葉裏。

19 詞の全文には「半榻清風，一庭明月，書齋幽會情難說。美人兀自更多情，番做箇翰林風月。 回頭一咲生春，却勝酥胸緊貼，尤雲滯雨。聽嬌聲輕聒。疏竹影蕭蕭，桂花香拂拂」とある。

図二　「後庭宴」

ごとに詩詞が付せられており，コメントの機能を果たしている[20]。「將軍欲搗陰山後（将軍は陰山の後ろを攻めようとする）」と題する節では，間男の趙大里が人妻の金氏に彼女の「屁股（お尻）」を攻めるようねだられるという場面を描いている。最後には，先述の「後庭宴」が引用され，『花営錦陣』のバージョンと比較すると，わずかな文字の異同しかない[21]。また，金氏が大里のために，ジャスミンの水で前の陰部と後のお尻を一緒にきれいにする一節は，「自家準備後庭花（自ら後庭花を準備する）」と名付けられる[22]。

『花営錦陣』「後庭宴」が示したように，女の「後庭花」を攻めることは，春画の絵柄の一種になっていたようだ。やや時代が下るが，清代の名高い文人李漁の作とされる『肉蒲団（にくぶとん）』の中では，「後庭宴」に類似する構図の春画への言及がある[23]。その第十七回では，主人公の未央生が縁続きのある四人の女 ── 香雲，瑞珠，瑞玉，花晨と一緒に酒宴を開く場面が描かれていた。後家の花晨は春画の描いてあるカルタを持ってくる。香雲姉妹が一枚をめくって見ると，一人

---

[20] 『繡榻野史』では，秀才の姚同心（あだ名は東門生）・彼の妻の金氏・彼が寵愛している若い書生の趙大里の間およびその周辺でおこなう性戯を描いている。

[21] ［明］呂天成『繡榻野史』，陳慶浩・王秋桂主編『思無邪匯宝』２（法国国家科学研究中心，台湾大英百科，1995），巻二，191-192 頁。
詞の原文には「半榻清光，一窗明月，床頭幽會情難說。美人無可奈多情，翻做個翰林風月。回頭一望生春，却勝酥胸緊貼，尤雲殢雨聽嬌聲，輕聒玉樹影蕭蕭，桂花香拂拂」とある。
『繡榻野史』には『花営錦陣』からの引用と思われる詩詞が七首ある。

[22] 前掲『繡榻野史』巻一，140 頁。

[23] 『肉蒲団』は好色の書生未央生の女色遍歴と悟りを述べている。

の少女が太湖石の上にうつむけになり，「後庭（肛門）」を突き出し，男と「龍陽（肛門交）」[24]をする場面が描かれている。三人はみな笑い出して，「這是甚麼形狀！為何丟了乾淨事不做，做起齷齪事來？（なんて恰好なの。どうして上品なことをしなくて，汚いことをやるのでしょう）」と言う。花晨はこれが「奴要嫁傳」という物語に基づいているのだと説明する。一人の娘が貞潔を守るため，嫁入り前に，お尻を女陰に代用して相手と情を通じ合ったのであると。

その後，みなは酒を回しながら，カルタを一枚ずつ取り，描かれている体位をまねするというゲームをして気分を盛り上げた。瑞珠，香雲に続き，花晨の番になる。花晨がさきほど騒動を起こしたその一枚を取って顔色を変えると，以前より彼女の自慢げな様子に不満を抱いていた香雲姉妹は，それを見て騒ぎ出し，たちまち彼女のズボンを脱がせ，どこまでも絵のとおりにさせようとした。むりやりさせられた花晨は動くこともできなくなり，女中の肩を借りて帰ったが，その後肛門が腫れて，寒気と熱で三，四日眠ってようやくよくなったと叙述される[25]。「後庭花」をすることが女性に与える苦痛を物語っている。

「奴要嫁傳」について，パトリック・ハナン（2010）は，明代文人鄧志謨の編纂と思われる『洒洒篇』巻一には「奴要嫁」という話が収録されており，両者のあらすじは同じであるが，文字の異同が多いと指摘した[26]。『洒洒篇』の「奴要嫁」では肛門交をする描写について，「採得此後庭花，亦是大得意處（この後庭花〔肛門〕をつみとれたことは，大いに愉快である）」や「女子作龍陽，亦大是好笑事（女性が龍陽〔肛門交〕をするのは，なんとおかしいことだ）」という眉批がはさまれている[27]。女性との肛門交は一般的な性行為でなく，からかいの対象であることが見いだせよう。

強いられた「後庭花」行為に苦痛を感じた花晨とは対照的に，「後庭花」を好む女性もいる。『金瓶梅』第三十七回，西門慶は東京の蔡太師邸の執事である翟謙から，妾を探すという依頼を受け，番頭の韓道国の宅を訪れ，妻の王六児に出会う。韓道国と娘の愛姐が東京に旅立ったのち，西門慶は馮のばあさんに仲介を頼み，留守を預かっていた王六児のところを再び訪れる。二人の性交の場面では，「原來婦人有一件毛病，但凡交姤，只要教漢子幹他後庭花。在下邊揉着心子纔過，不然，隨問怎的，不得丟身子（そもそもこの女には，ある奇妙な癖があり，まぐわう時には，かならず男に後庭花をさせて，下のほうでは心子（さね）を揉まれていないとだめなのでした。そうでなければ，どんなことをしても達することができないのです）」と，王六児が「後庭

---

[24] 「龍陽」の出典は『戦国策』「魏策」，魏の安釐王の寵愛を受けている，公子の「龍陽君」のことを指す。後世では男色を表す言葉の一つとしてこの人名が用いられる。

[25] ［清］情隠先生編次『肉蒲団』，陳慶浩・王秋桂主編『思無邪匯宝』15（法国国家科学研究中心，台湾大英百科，1995），第十七回，440-453 頁。

[26] ［美］韓南（ハナン氏の漢名）著，楊光輝訳『創造李漁』（上海教育出版社，2010），123 頁，脚注 10。英語版 *The Invention of Li Yu.*（Harvard University Press, 1988）にはこの指摘が見えない。

[27] ［明］嘯竹主人編，鄧百拙生校『新刻洒洒篇』，内閣文庫蔵本，巻之一，「奴要嫁」，三十四葉裏。

花」の体位を好むことが描写されている[28]。

また，第五十回，胡僧の秘薬を入手した西門慶は，ただちに王六児と薬の効用を試し，そこで王六児が，「我央及你，好歹留些工夫，在後邊耍耍（おねがい！どうにか力を加減して，後ろもかわいがってよ）」と例の「後庭花」をねだる[29]。崇禎本には，「一人兼南北之趣，六兒不怕閑童妬殺耶（一人で南と北の趣（おもしろみ）を兼ねるとは，六児は相手のいない童（ちご）に恨み殺されることを恐れないのか）」との眉批が見える[30]。先述のように，「南」は男色を意味するので，「北」は女色を意味するようになる。女性を相手としているが，「後邊」への挿入が男色においておこなわれる行為だという認識がうかがわれる。

女の陰部を放置し，ひたすら「後庭」をかわいがるという「性的倒錯」を，さらにジェンダーの越境にまでいたらしめる話は，明末における男娼の様相を生き生きと描き出した小説集『龍陽逸史（りゅうようい つし）』に収録されている。その第二回では，何よりも「後庭花」を好む金持ちの李員外が登場する。彼は李翠児という器量のよい女中を寵愛しており，いつも彼女の後ろをいじくっている。さらに，彼女を「小官」[31]のいでたちに扮装させ，男性用の靴と靴下をはかせ，道士のころもをまとわせ，帳簿づけや金勘定など，小者としての技能を教え，書斎に住まわせて自分の世話をさせていた。『肉蒲団』の花晨と異なり，李翠児はこのやり方を楽しんでいるように描写されている[32]。女性が「假小官（偽の小官）」と見なされ，女陰が打ち捨てられて「後庭花」が弄ばれるという，二重の「倒錯」が，このエピソードを成り立たせている。この話の主人公は，続いて叙述される李翠児の息子の李小翠という本当の「小官」であり，翠児のエピソードは正文を導く入話にすぎない。

以上より，「後庭花」が男女双方どちらも持っている器官（肛門）であり，いずれとの性交においてもおこなわれる行為（肛門交）として描かれていることは明らかであろう。ただし，女性を相手にしておこなう際は，男色の代替行為と見なされることが多い。

二　『金瓶梅』における「後庭花」の独自性

明清時期のポルノグラフィーにおける「後庭花」の基本的な意味合い・使い方を確認した上

---

[28] 前掲『金瓶梅詞話 万暦本』巻八，第三十七回，十葉裏。

[29] 前掲『金瓶梅詞話 万暦本』巻十，第五十回，五葉裏。

[30] 崇禎本のテキストは，蘭陵笑笑生原著『新刻繡像批評金瓶梅』，内閣文庫蔵本を使用した。『新刻繡像批評金瓶梅』巻之十，第五十回，五十葉裏。

[31] 「小官」とは，男同士の性行為で挿入される一方を指し，通常は若い少年であり，生業としての「陰間」と一般人の両方を含む。または若者の通称。

[32] ［明］京江酔竹居士 浪編『龍陽逸史』，陳慶浩・王秋桂主編『思無邪匯宝』 5（法国国家科学研究中心，台湾大英百科，1995），第二回，100 頁。

で，本節では，『金瓶梅』における「後庭花」の用例に着目し，その普遍性と独自性を検討してみたい。

清代初期以来，『金瓶梅』は『三国演義』『水滸伝』『西遊記』とともに「四大奇書」と称されてきた。この作品は，英雄たちの銘々伝である『水滸伝』中の武松物語の一節から着想を得て，『水滸伝』のパラレルワールドを描いている。虎退治で有名なヒーロー武松の敵討ちから生き残った西門慶は，武松の兄嫁である潘金蓮を娶って第五夫人とし，性や食を貪る西門家の日々がはじまる。妻妾，女中，妓女および小者との性生活は，西門慶の日常の一部として緻密に描写されているため，『金瓶梅』はポルノグラフィーの要素を含んでいる。しかし，男色の匂いが強く感じられる語彙「後庭花」は，西門慶の性行為において，王六児と潘金蓮という二人の女との場合にのみ用いられる。男色の描写に用いられるのは，第九十六回，西門慶の婿である陳経済が土方の一味を率いる侯林児なる男に身を任す場面だけである。西門慶の男色行為は，小者の書童や王六児の弟である王経との間に発生するが，前者では「摸弄他屁股（その尻をまさぐる）」[33] と描写され，「後庭花」という美称は用いられない。

西門慶は先述した『龍陽逸史』の李員外と同様に，女の「後庭花」を攻めることを好んでいる。『金瓶梅』第三十八回では，「後庭花」の体位を含む，西門慶と王六児の性交場面が描かれ，西門慶が「王六兒，我的兒！你達不知心裏怎的，只好這一樁兒。不想今日遇你，正可我之意。我和你明日生死難開（王六兒，かわいいひと！お前のとうさんはな，いったいなんでだろうねえ，こういうふうにしてやるのが好きなんだ。思いもかけず，いまおまえに出会って，おれは大満足なのさ。おまえとふたり，これからも死んでも離れられないぜ）」と打ち明ける[34]。

また，第五十二回において，西門慶は第五夫人の潘金蓮との性交でも「後庭花」を試そうとする場面がある。王六児とは異なり，潘金蓮はそれに習熟していないように描かれている。西門慶に「後庭花」を提案された潘金蓮は，「好個沒廉恥冤家！你成日和書童兒小廝，幹的不值了，又纏起我來了。你和那奴才幹去不是（恥知らずの悪党ね！一日じゅう，書童の小僧とさんざんやったくせに，あたしにまでまとわりつくんだから。あの奴隷野郎とやってりゃいいじゃないの）」と述べ，それが男色の際におこなわれる行為だという認識を示す。ここで興味深いのは，西門慶の返事である。彼は「怪小油嘴兒，罷麼。你若依了我，又稀罕小廝做甚麼？你不知你達心裏好的是這樁兒。管情放到裏頭去，我就過了（おしゃべりさん，もういいだろう！おまえがおれの言うことを聞いてくれりゃ，あんな小僧なんかありがたがるもんかい。おまえは知らんだろうが，このとうさんは，こいつが大のお気にいりなのさ。なかに入れたとたん，たちまちいっちまうんだ）」と説明する[35]。女性をわざわざ「小官」すなわち男装させてから後ろをいじ

[33] 前掲『金瓶梅詞話 万暦本』巻七，第三十四回，十一葉裏。
[34] 前掲『金瓶梅詞話 万暦本』巻八，第三十八回，五葉表。
[35] 前掲『金瓶梅詞話 万暦本』巻十，第五十二回，一葉裏。

くる李員外とは対照的に，西門慶は女性との肛門交のほうを好むことが明確に叙述されるのだ。

無論，これが潘金蓮を説得するための言い訳だという可能性も存在する。しかし，西門慶の，書童や王経との男色行為を分析すると，西門慶にとって，男色は特定の条件でのみおこなわれる行為であることがうかがわれる。まず，書童の場合を確認しておこう。書童は，第三十一回，ちょうど西門慶が息子を得て官吏になる時，李知県なる当地の長官より西門邸に送られてきたものである。ジョバンニ・ヴィティエッロ（2011）は，明代知識層の男色趣味という背景を確認した上で，西門慶が「同性愛（ホモエロティック）」の欲望を取り入れることは，上流階層に昇進し，その審美的および文化的基準を満たさんとするという彼の欲求に直接関係していると指摘した[36]。西門慶が家庭および社会の領域において上昇期に入る際に，書童を登場させたことはやはり偶然でなく，作者による周到な設計であると考えられる。そして，第六夫人の李瓶児母子が相次いで亡くなった後，潘金蓮に侍女の玉簫との私情を暴き出されたことをきっかけにして，書童はひそかに西門邸から逃げ去った（六十四回）。このことは，その後この豪勢な屋敷が衰退に向かっていく運命を暗に示しているであろう。

次に，王経の場合である。王経は王六児の弟で，はじめて登場するのは第四十九回，王六児の誕生日の日，西門慶を招待すべく使者として西門の屋敷につかわされてきた。二度目の登場は第五十八回になり，西門邸の使用人となったようなふるまいをしている。現存する版本では，彼がどのように西門邸に入ったのかについて何の説明もされていないが，本来は第五十三回から五十七回，すなわち抄本であった時点から別人による増補だと思われる部分の，どこかで述べられていた可能性がある。

西門慶との性行為が描かれるのは第七十一回で，昇進した西門慶は謝恩のために上京し，後任に任じられた何永寿なるものの伯父，何太監（宦官）のところで泊まる。初日の夜，すっかり酔っぱらった西門慶は，寝床に横たわったが，しばらくの間，寝つかれない。深夜にかすかな音を聞き，まして家を離れてからすでに久しいので，王経を呼んで添い寝をさせようかと思っている矢先，月影のもとに立っている李瓶児（その時点ではすでに亡くなっている）が目に入った。その後，二人は性行為に及んだが，目覚めると，精液が寝床一面に流れていることに気づき，「南柯の一夢」であったことがわかる。初日にこの夢精のことがあったので，次の夜には，西門慶は王経を地面に寝させ，夜中に寝床に呼び上げ，服をすべて脱がせ，蒲団の中で抱きしめた。そこでは「兩個口吐丁香，舌融甜唾（二人とも口は丁子（ちょうじ）のような舌を吐き，舌は甘い唾液にとろける）」と描かれている。直後に付されている「不能得與鶯鶯會，且把紅娘去解饞（鶯鶯に会えないばかりに，とりあえず紅娘で渇をいやす）」という詩句が示唆するとおり，王経は不在の女の替え玉として使われているのだ[37]。

---

[36] Giovanni Vitiello, *The Libertine's Friend: Homosexuality and Masculinity in Late Imperial China*.（The University of Chicago Press, 2011）, p.94.

旅や寺院など，女の調達が困難になる状況で，代わりに男（一般的には少年）を性欲の相手とすることもまた，ポルノグラフィーの定型である。『肉蒲団』では，遊学にかこつけ，美女遍歴の旅に出る時，主人公のそばには二人の小者が付き添っており，セックスを含めていろいろな世話をさせていたと叙述される。そして第八回，陽具拡大術を実施する前夜，未央生は欲情を抑えられず，小者の書笥に戯れた後，改造された陽具は「後庭（肛門）」では受けられないので，これから先は後門に用事がなくなると述べられる[38]。女性遍歴の本筋に入ると，二人の小者はたちまち物語から放擲される。女色の代替品にすぎない男色というモードが浮かび上がってくるだろう。

西門慶はさまざまな女を手折ることに情熱をかたむけているように描かれている。女性との性行為が濃密に描かれ，読者の感覚器官を刺激することとは異なり，男色は性欲解消の便利さまたは社会的意義において言及される。西門慶は「後庭花」を好むが，男の「後庭花」にこだわりがないように描かれているところが，『金瓶梅』の特異な点と考えられる。「我的心肝，你達不愛別的，愛你好個白屁股兒，今日儘着你達受用（おれのかわいい子，おまえのとうさんはな，なによりもおまえの真っ白いお尻が好きなんだ。きょうはおれを，たっぷり楽しませておくれ）」という李瓶児への賛美からは，西門慶の臀部へのフェティシズムがうかがえる[39]。「後庭花」は，「隔山取火」[40] や「馬爬」[41] など彼の慣用の体位と同様に，この種のフェティシズムのあらわれと考えることができるのではないだろうか。

西門慶は公の場での身分の提示や女色の代替品として男色を利用した。同様に，西門慶の婿の陳経済の男色行為もまた階層と密接なつながりがある。西門慶の死後，正妻の呉月娘に追い出された陳経済は恐ろしいスピードで社会の最下層に転落した。第九十三回では，道観に入った陳経済は一番弟子の金宗明と男色関係を結び，またその前にはすでに乞食長屋で，侯林児に身体を弄ばれたことがあると叙述される。第九十六回，陳経済は侯林児と再会するが，二人の

---

37 前掲『金瓶梅詞話 万暦本』巻十五，第七十一回，九葉表～十三葉表。鶯鶯は唐代の文人元稹による，張生と鶯鶯との悲恋を描いた伝奇『鶯鶯伝』のヒロインである。この小説は後に語り物や演劇に改編された。紅娘は鶯鶯に仕える侍女であり，張生と鶯鶯の仲を取り持つ役目を果たす。

38 前掲『肉蒲団』第八回，263-265 頁。

39 前掲『金瓶梅詞話 万暦本』巻六，第二十七回，五葉表。

40 『金瓶梅詞話』における「隔山取火」の初出は第十八回。小野・千田は「隔山取火の姿勢」（前掲『金瓶梅』上，203 頁），田中は「山を隔てて火を取る」（前掲『新訳　金瓶梅』上，373 頁）と訳す。Roy の英訳は“Poke up the fire on the other side of the mountains”（前掲 *The Plum in the Golden Vase 1*，p.372），そして注 32 に“vaginal intercourse from behind”（p.530），すなわち「後ろからの膣性交」と説明する。ここは Roy の理解を取る。

41 『金瓶梅詞話』における「馬爬」の初出は第十回。小野・千田は「馬なり」（前掲『金瓶梅』上，107 頁），田中は「四つ這い」（前掲『新訳　金瓶梅』上，205 頁）として訳す。Roy の英訳（前掲 *The Plum in the Golden Vase 1*，p.201）は“get down on all fours”である。

性行為は「這侯林兒晚夕幹經濟後庭花，足幹了一夜，親哥、親達達、親漢子、親爺，口裏無般不叫將出來（この晩，侯林児は経済の後庭花を攻め，夜通し楽しみつづけた。経済といったら，おにいさんとか，ととさんとか，旦那さまとか，おとうさまとか，あらゆるうわごとを口走った）」と描写され，「後庭花」が用いられている[42]。西門慶が実践している，上流階層の間に盛行した男色鑑賞とは対照的に，陳経済の境遇はむしろ性の経済学を反映している。道観や乞食長屋など，女の調達が困難である場所で，男性は代わりに男の「後庭」を貪っている。

『金瓶梅』の第八十回以降は，別人による増補であるとの説がある[43]。それがこの「後庭花」の使い方の違いを生み出しているとも考えられる。また，「第一奇書本」では，九十八回の描写について「醜絶。敬濟、金蓮不復辨矣（非常に醜い。敬済か金蓮かすでに見分けることができなくなった）」という評語がはさまれている[44]。上流階層の男である陳経済は，女性ひいては「淫婦」の金蓮の地位に落とされ，男性性が奪われる。「醜絶」と思われるのは，男色行為において，挿入される側という女性のポジションに置かれることにより，男性性を喪失したということであろう。

欲張りな西門慶は，女を手折るとともに，男色を賞翫している。西門慶は自身の，そして相手をする女の情欲によって落命した後，陳経済は彼の後任として物語を収束する役割を果たしているが，その能力は西門慶に遥かに及ばない。男性との性交で挿入されることは，性および社会において無力の男である陳経済の人物像を示している。

三　「後庭花」を攻められる男性主人公の登場

男・挿入する／女・挿入されるという正当と見なされる性的関係を踏まえると，挿入されることは男性性を損なう危険性がある。『金瓶梅』であれ，『龍陽逸史』であれ，その男色描写では，挿入される，すなわち女性側にされるほうは，年齢や地位，階層において下位に置かれている。男性主人公の性体験は挿入する行為を繰り返すにとどまる。

マシュー・ソマー（2000）は，宋代から清代にかけて，男性間の性行為に対する司法上の関心は，一貫して，肛門への男根の挿入，それによって暗示される性的役割の区分，そして挿入されることがもたらす汚名に焦点が当てられてきたと指摘する。また，ソマー氏によれば，男

42　前掲『金瓶梅詞話 万暦本』巻二十，第九十六回，十葉表。

43　荒木猛『金瓶梅研究』（思文閣出版，2009），第二章を参照。

44　「第一奇書本」とは，清代の張竹坡が「崇禎本」にもとづき，総評，眉批，夾批，回批を加えたものを指す。第一奇書本のテキストは，蘭陵笑笑生原著『金瓶梅　両種竹坡評点本合刊』（附図）全八冊（文楽出版社，1975 頃）を使用した。「第一奇書本」において，「陳經濟」は「陳敬濟」と表記されている。

『金瓶梅　両種竹坡評点本合刊』巻六，第九十六回，十一葉表。

性同士の性交を明確に禁止した最初の法令は嘉靖時期（1522–67）の「比引律」に見られる。「將腎莖放入人糞門內淫戲，比依穢物灌入人口律，杖一百（陰茎を他人の肛門に入れて戯れるものは，汚物を他人の口に流し込むことに対する法令に倣い，重い竹で百回殴られることになる）」という[45]。挿入されるというのは，口の中に汚物を流し込まれることに相当する。性的暴行より，汚名と屈辱が強調されており，そして明らかに挿入された人だけに影響を与えたと，ソマー氏は論じた[46]。

しかし，明末にはこのような男色行為における権力関係を打破しようとする傾向がうかがえる作品がある。『弁而釵』は，「貞」「侠」「奇」「烈」などの道徳基準に則っている模範的な男性間の感情を謳歌し，情によって，挿入されるという「汚点」が相殺できると主張する。『弁而釵』「情侠紀」第三回では，書生の鍾図南が文武両道の主人公張生を酔わせて戯れる。目が覚めた張生は激怒し，剣を抜いて鍾図南を斬ろうとしたが，図南は堂々として少しも臆する気色がない。張生は「男遭女淫，有何面目立於天地間（男として女にされるべき淫行に見舞われ，どうして天地の間に立つ面目があるか）」と嘆いたが，自尽して意志を貫こうとする鍾図南に説得された結果，鍾図南を「真情人」と賞賛し，「弟雖男子，亦襝衽甘為妾婦矣（男の身ですが，恭しくお辞儀をしてよろこんで女の役をしましょう）」と二人の関係を承認する[47]。真摯な情であれば，挿入されることがもたらす穢れを落とせるという理念が示されている。

一方，主人公の寵愛を受けている若者を登場させ，主人公の妻妾や女中たちと密通をおこなわせることにより，多彩な性描写を追求する書き方が見られる。『金瓶梅』と同時期の作品『繡榻野史』では，多方面で西門慶と対になる主人公東門生を創りあげた。道具や薬に頼るにしても，いつも精力絶倫な西門慶と対照的に，東門生は勃起状態を長く維持できず，往々にして補足として「緬鈴」なる淫具を陰部に入れることでしか，妻の金氏を満足させることができないと叙述される[48]。道具類のほかに，昔から寵愛していた若者の趙大里を金氏に紹介した。男色行為において挿入される側にいる大里は，それ以降金氏や金氏の女中に戯れ，事実上の主人公の地位を手に入れたと言える。肛門交について，小説には，第一節で引用した大里が金氏の「後庭花」を攻めるエピソードのほかに，東門生と大里の肛門交およびこの三人の三つどもえの性行為とある。『繡榻野史』において，「後庭花」を攻める，あるいは攻められる男女にとって，この行為は性的快楽を達成するための手段の一つにすぎない。

---

45 黄彰健編著『明代律例彙編』（中央研究院歴史語言研究所，1979），下冊，巻末附録「比附律条考」，1068 頁。

46 Matthew H. Sommer. *Sex, Law, and Society in Late Imperial China.*（Stanford University Press, 2000），pp. 119–120.

47 ［明］酔西湖心月主人著『弁而釵』，陳慶浩・王秋桂主編『思無邪匯宝』 6（法国国家科学研究中心，台湾大英百科，1995），「情侠紀」第三回，163–164 頁。

48 前掲『繡榻野史』，巻二，158 頁。

大里は若い書生と設定され，ポルノグラフィーの主人公になり得る身分である。さらに一歩進むと，西門慶や東門生のような，挿入する行為を繰り返すのみのポルノグラフィーの主人公が脇役に格下げされ，挿入される可能性を持つ主人公が登場する。清代初期の小説『桃花影』およびその続編『春灯鬧』，この両者の影響を受けた『鬧花叢』の類である。これらの小説では，「美人局」のエピソードが描かれている。すなわち，ある有力者が美少年の主人公を酔わせて，その「後庭花」を攻める。主人公の怒りを解消するために，妻を進呈するという話である。具体的な内容の検討に入る前に，挿入される可能性を持つ主人公は，なぜ清代初期のポルノグラフィーに造形され，そしてなぜすぐに消えたのかという問題について，先行研究を確認しておこう。

ヴィティエッロ氏は，清代前期から中期に出版された一連のポルノ小説を取り上げ，男性主人公の異性愛と同性愛のバランス，ホモソーシャルとホモセクシュアルの関係性を分析し，明末から清代中期にかけての男性性の基準の変容を考察した。氏によれば，明末から清代中期においてポルノグラフィーの主人公とその男性性は，さまざまな変化を遂げた。氏はおおまかに作品を三つのグループに分けている。『桃花影』，『春灯鬧』および『鬧花叢』は一番目のグループであり，純粋な性のユートピアを描き出している。これらの小説では，裕福な家に生まれ，さわやかな容姿と抜群の文才を兼ねた主人公の，政治的および官能的な冒険と成功を述べている。彼らにとって，男性性の越境を含むいかなる越境でも罰がない。男に挿入されることがもたらす汚名は，彼らの性の悦楽には何の影響も及ぼさないように描かれている。

氏は続いて二番目のグループの代表として，康熙時期（1662–1722）の刊行と思われる『巫山艶史』を取り上げる。『巫山艶史』において，「美人局」のエピソードはなくなるが，主人公は最終的に妻妾を捨てて男性の友人と共に俗世の煩悩や性欲を超越する旅に出ると叙述される。官能的な幻想からの救済というポルノグラフィーにおけるありふれた結末の中で，精神と肉欲および男性間の友情と異性愛という対立関係が浮かび上がってくる。最後に，三番目のグループの小説では，主人公のホモソーシャルな連帯関係は完全に削除され，同性間の性行為は卑俗な使用人や悪党と関連付けられ，主人公のそれに対する嫌悪感さえ表現されるようになった。

「美人局」の話が，なぜ清代初期以降の作品において排除されたのかについて，氏は政治的，法律的，社会的な面から分析をおこなった。そして，マシュー・ソマーの清代における性犯罪の法令についての研究を紹介した。清代，とくに雍正時期において，強制であるかどうかにかかわらず，男性間の性行為は，合法的な婚姻制度からはずれた非法行為であると見なされるようになった。清政府は法令の修正により，男性と女性の役割をはっきり区分するジェンダーイデオロギーを構築しようとする。女性の貞操に力を注ぎこんだ清政府は，伝統的な性別構造を強化するために，男性の貞操にも関心を寄せた。「良民（使用人や娼妓を除く，一般民衆およびそれ以上の階層）」の男性であれば，性行為において挿入されることが禁じられる。これらの法律的な発展は，同時期の小説の表現に影響を与えた可能性があると，氏は指摘した[49]。

ヴィティエッロ氏は，清代前期から中期にかけての作品を概観し，「美人局」というエピソードおよびそのバリエーションに着目し，主人公の男性性がいかなる変容を遂げたのかについて論じた。小論では，「美人局」を描いた三つの小説を取り上げ，その男色描写に注目し，肛門交の性描写はいかに従来の男色描写の枠を越えたか，どのように発展していったかについて考察したい。

四　『桃花影』から『春灯鬧』へ ── 男色描写の変容

『桃花影』と『春灯鬧』の著者檇李煙水散人は明末に生まれ，清初に活躍した文人徐震の号と思われる[50]。現存する徐震の作と思われる通俗小説は数多くある。『春灯鬧』の紫宙軒刊本の扉には「桃花影二編」という副題が見られ，『桃花影』の続編と考えられる。実際，両作品はさまざまな面において共通している。また，『鬧花叢』は『春灯鬧』の主人公の設定を踏襲し，『桃花影』の性描写を多く借用しているので，今回は論述の重きを前の両者に置く。以下，『桃花影』と『春灯鬧』の異同について考察する。

『桃花影』と『春灯鬧』はポルノグラフィーの旧套を守り，主人公の，さまざまな女との出会いを描き出している。両作品において，主人公は女色さえ上回った容姿の持ち主であると描写される。『桃花影』では，主人公の魏玉卿は，「却又生得面白唇紅，神清骨秀，不要說男子中少有這様俊俏郎君，只怕在婦女内，千中選一，也尋不出這般丰姿姣媚（なんと，これがまた，生まれついての真っ白な顔に紅い唇，顔形はさわやかで麗しい気品がただようご仁です。男のなかでも，これほどの器量よしが少ないことは言うまでもありませんが，女のなかにだって，千人に一人の美女でも，これほど艶めかしい容姿の者は，見つけることはできないでしょう）」と描かれている[51]。『春灯鬧』の場合，主人公の真楚玉は「真郎只合喚真娘（真郎はまさに真娘と呼ぶべきだ）」という詩句に詠われるように，西施や王昭君もどきの美貌を誇る少年書生である[52]。

さらに，両作品は，主人公の女装という異性装の趣向を共有している。とくに，『春灯鬧』に

---

[49] 前掲 *The Libertine's Friend*, Chapter Three “Libertine Masculinity,” pp.93–131 を参照.

[50] 楊力生「関於煙水散人，天花蔵主人及其他」（附録：林辰「煙水散人及其小説質疑」），『明清小説論叢』第一輯（春風文芸出版社，1984），321–342 頁，楊琳「煙水散人生平著作考述」，『明清小説研究』，2009 年，259–272 頁を参照されたい。

[51] ［清］檇李煙水散人 編次『桃花影』，陳慶浩・王秋桂主編『思無邪匯宝』17（法国国家科学研究中心，台湾大英百科，1995），第一回，28–29 頁。日本語訳は武田雅哉先生（北海道大学名誉教授）のご指導をいただいた。

[52] ［清］檇李煙水散人 戯述『春灯鬧』，陳慶浩・王秋桂主編『思無邪匯宝』17（法国国家科学研究中心，台湾大英百科，1995），第一回，241 頁。

おいて，楚玉は自分の女装姿について，「天既生我以如此之容，何不即使變為婦人（天はおれにこのような顔で生まれさせたのに，どうしておれを婦人にしないのか）」と嘆息する場面が叙述される[53]。明清時期の通俗文芸において，異性装はありふれた趣向にすぎないが，ここまで「ジェンダーの流動性」という概念に近づいた描写はめったに見られない。楚玉は続けて，士大夫の衣装をまといながら権力者に媚びへつらう今世の知識人たちこそ女と変わらないと，自分の女装のために理屈をつける。しかし，全体から見ると，楚玉の女装は，男性との擬似結婚や女性との私通を果たす仕掛けとして利用されていることがわかる。世間に対する風刺より，異性装は主人公の女色と男色の遍歴の仕掛けに取り込まれている。

類似するプロットを持つ両作品は，二つの重要な区別を示している。一つは「美人局」に関連する男色の性描写，二つは主人公の政治上の境遇である。まずは，男色描写を確認しておきたい。『桃花影』第六回「後庭花強捉醉魚（後庭花で強引に酔魚を捕える）」で，玉卿が科挙試験のために南京に赴き，大商人の丘慕南のところに泊まるエピソードが叙述される。「南／男を慕う」という名前が示しているとおり，丘慕南には，もっぱら男色に惹かれるという生まれつきの「毛病（癖）」があった」。彼は玉卿の美貌に惚れ，「美人局」の計を案ずる。すなわち，玉卿を酔わせて性交を果たした後，玉卿の怒りを解消するために，妻の花氏を玉卿に進呈するという計略である。

金や才能に恵まれている玉卿をいかに手折るかについて悩むところで，丘慕南は「設或僥倖事成，那魏秀才十分發怒，不肯恕饒，便捐軀也可，傾家也可，何足懼哉（もしも幸運にして事が成し遂げられ，魏秀才〔玉卿〕が非常に怒り，許そうとしないなら，身をささげてもいい，家を滅ぼしてもいい。どうして恐れるに足るか）」と決意を表明し，酒を飲んで，舞いながら漢武帝の「秋風辞」[54] を歌いはじめた，と描写される[55]。先述した『弁而釵』「情侠紀」の鍾図南と同様に，丘慕南は「侠士」の品格があるように描かれている。

その後，慕南は玉卿を酔わせてその「後庭花」を攻めた。二人の性行為については，「兩頰暈紅，猶如胭脂點染（頬に赤みがさし，べににそめつけられたようだ）」「露出兩股潔白如玉（玉のように白い両足をあらわにする）」など玉卿の外見描写にとどまる[56]。念願が叶った翌日，丘慕南は玉卿を家に住まわせ，自身は商売のため玉卿の地元華亭に赴き，一旦物語から姿を消す。物語の終盤，半痴和尚のもとで修行をしてきた慕南は，再び玉卿を訪れ，玉卿一家をつれて仙界に帰り，物語は幕を閉じる。書き手は丘慕南に，主人公たちを危機的な状況から救い出す「侠士」や，主人公を世俗から解脱させる導き手など，さまざまな役割を担わせていることが見い

---

53 前掲『春灯鬧』，第三回，274 頁。

54「秋風辞」とは，漢武帝が河東を行幸し，船の中で宴会を開いた時，秋の景色を詠んだものである。

55 前掲『桃花影』，第六回，115 頁。

56 前掲『桃花影』，第六回，113 頁。

だせよう。主人公に恥をかかせたはずだが，丘慕南は全体的にポジティブに色付けされている。

一方，「情侠紀」の張生に比べて，玉卿は自分が「侮辱された」ことにそれほど激しい反応を示していない。花氏になだめられ，簡単に怒りを収める。作者は玉卿に挿入されることを体験させたが，具体的な描写をしていない。玉卿にとって，挿入されることは一度だけの出来事にとどまり，深刻な意味または危機的な意味は賦与されていない。その後，男色行為を含める性行為において，玉卿はいつも挿入する役割を担っている。

『桃花影』は回ごとに評語がついており，おそらくは作者自らの手によるものと考えられる。第六回の回評では，玉卿はいつも女性からうまい汁を吸っているが，今回は慕南にやられたというある者の疑念に対して，「不然。慕南止博得半晌歡娛，花氏却被玉卿睡了數月，以此較量，孰得孰失（そうではありません。慕南は一時の快楽を得たのみで，花氏は玉卿に数ヶ月寝取られました。比べてみると，どちらが得でどちらが損と思いますか）」という損得計算がおこなわれ，「美人局」のエピソードに理屈をつける[57]。

さらに，作者が性的能力において，玉卿と慕南のバランスを調整しており，主人公の男性性を確保しようとする細部の描写が見られる。物語の序盤，玉卿は半痴和尚から丹薬をもらい，性器はさらに「修偉（長くて立派）」になり，多くの女性を惹きつける[58]。「挿入された」という一つの例外を除けば，まさにポルノグラフィーの主人公に相応しい人物である。一方，丘慕南の性器は「不甚修肥（あまり長く太くない）」と描写される[59]。

一方，『春灯鬧』における男色描写の割合は高くなっている。『春灯鬧』は時代背景を明末の李自成の乱に設定しており，主人公の，正月十五日の元宵節におけるいくつかの奇遇を述べている。「美人局」の話は第一回から第二回にかけて語られている。元宵節の夜，主人公の楚玉は書生姚子昂の妾・蕙娘と通じ合う。再会を果たすために，二人は男色好きの姚子昂を色仕掛けで落とすという計略を定めた。すなわち，楚玉は詩文の添削を言い訳として姚子昂に面会を求め，酔ったふりをして，「後庭花」を攻めようとする姚子昂をつかまえて，まずは女中の霊芸（れいうん）を手に入れる。さらに，子昂に蕙娘との密通を黙認させる。楚玉は主導権を握っており，自主的に「美人局」に参加した。

『桃花影』と異なり，楚玉と姚子昂との性行為は一時しのぎの便法にとどまらず，何回にもわたって緻密に描き出されている。男色行為において，楚玉はより積極的に取り組む姿勢を示している。性行為の最中に，「就像婦人一般的（女のように）」，尻から淫らな水が溢れ出て，男色行為を楽しんでいるように描写される[60]。また，「後庭」が弄ばれる時，「此物插進在內，苦乎樂

---

[57] 前掲『桃花影』，第六回，124 頁。
[58] 前掲『桃花影』，第六回，119 頁。
[59] 前掲『桃花影』，第六回，118 頁。
[60] 前掲『春灯鬧』，第二回，262 頁。

乎（このものを挿しこまれて，苦しいかそれとも気持ちいいか）」という子昂の質問に対し，楚玉は「気持ちいい」とは答えないが，「酸癢（むずがゆい）」と感じていることを認める。子昂はさらに興奮して，楚玉の体をひるがえらせ，足を高く持ち上げ，前から挿しこむことにすると叙述される[61]。感覚の議論や体位の転換は，『春灯閙』において，挿入されることが主人公の性の遍歴の重要な一環であることを示している。

「後庭花」が示しているとおり，男色行為において後背位は一般的である。主人公・主人公の妻・主人公に寵愛される小者の三つどもえというパターンを共有している明末の小説『浪史』では，体位により男色と女色を区別できるという論理を説いている。主人公の梅彦卿は若い後家李文妃を娶る。二人の新婚の夜，「後面（後ろ）」をいじくりたいと梅彦卿にねだられた文妃は，「吾摸着身兒，把臀尖兒聳起，你便爬上來，如龍陽一般，將柄兒斜插毯裡去，你左右一般耍子，可不是好（あたしはうつむけにし，お尻をつきだす。あなたは上に乗り，龍陽〔男色〕ぶりのように，そいつを牝へ斜めに挿しこむ。どうせ同じように楽しめるので，いいじゃないの）」と提案した[62]。

結婚した後，梅彦卿は昔から寵愛していた小者の陸閏児を寝室の隣の部屋に住まわせ，しばしば訪ねる。ある日，閏児を仰向けにし，「如婦人一般的幹你（婦人のようにやりたい）」と要求する[63]。男色の楽しみ方が後背位に定型化していたことを，逆説的に示しているエピソードである。したがって，『春灯閙』からは常套に縛られず，男色行為における多様な性的快楽を探究するという姿勢を読み取ることができるだろう。

『春灯閙』においては，女色と男色の描写の割合はほぼ半々になっている。文弱な書生として設定されている姚子昂のほかに，「侠士」丘慕南の「武」の特質を備えたキャラクターである姚子昂の同窓・高梧，権臣の豊儒秀も主人公を男色相手として戯れる。男色嗜好の「毛病（癖）」がある高梧は，李自成の部下の助けを借りて，姚邸から楚玉，蕙娘，霊芸を奪って李自成のところへ身を寄せる。高梧は一見悪役のようだが，「氣宇軒昂，議論英發（意気軒昂としており，雄弁を振るう）」と描写される[64]。さらに，幼い頃からある術士に「養龜之法（男性器を養う方法）」を教えられたので，「陰水」にぬれるとそれは長く大きく堅くなり，簡単に精を洩らさない[65]。高梧との交わりを通して，楚玉は今まで体験したこともないエクスタシーを味わい，おまけに「養龜之法」を授けられた。高梧は『桃花影』の半痴和尚などのように，ポルノグラフィーにおける秘薬や秘術を主人公に教える術士の役割を果たしている。その後，楚玉は李自成の

61　前掲『春灯閙』，第二回，267 頁。
62　［明］風月又玄子著『浪史』，陳慶浩・王秋桂主編『思無邪匯宝』4（法国国家科学研究中心，台湾大英百科，1995），第二十七回，184 頁。
63　前掲『浪史』，第二十八回，189 頁。
64　前掲『春灯閙』，第四回，299 頁。
65　前掲『春灯閙』，第五回，304 頁。

娘・李翠微の手を借りて高梧を殺すことで，姚邸から連れ出され，姚子昂や蕙娘らと離散させ，陵辱されたことに対し，復讐を果たした。

李自成軍から逃げて金陵に至ると，楚玉は権臣の豊儒秀の寵愛を受ける。豊儒秀は明の皇族の福王を金陵に迎え，皇帝にさせた有能で野心を持つ人物である。このように，『春灯鬧』において男色嗜好のある人物は，白黒で割り切れるのではなく，立体的で奥行きのある人物造形をされていることがわかる。

次に，玉卿と楚玉の仕官の道を比較したい。玉卿は科挙試験に合格して一挙に出世し，色香に惑わされながら功業をなしている。一方，『春灯鬧』の冒頭では，ある人相見が真家の前を通り過ぎたところ，楚玉を見て「好一個美秀郎君。所惜神太清，容太嫩，骨格太輕，雖則敏慧異常，不能顯達。單喜一生際遇，都在上元節夜（なんという器量のよい若君だ。残念なのは，その気質が清らかすぎ，容姿が弱々しくてもろすぎ，骨格が軽すぎることだ。人並み以上にかしこいとはいえ，栄達は得られない。ただ喜ぶに足るのは，生涯の奇遇がすべて元宵節の夜にあることだ）」と賞賛したと描かれている[66]。功名と無縁であり，生涯色事に耽るという主人公の人物像は，このように冒頭で明らかにされた。『春灯鬧』では，地位や名望を断念し，性行為において挿入することおよび挿入されることの両方の悦楽を享受する主人公を創り出した。この意味では，これまでの数多のポルノグラフィーとは一線を画していると言えるだろう。

管見のかぎり，『桃花影』は「美人局」の発想を描いた最初期のものである。第十二回の回評によれば，『桃花影』は明代の文言小説『天縁奇遇（てんえんきぐう）』から大きな影響を受けていることがわかる。『天縁奇遇』は主人公祈羽狄の美女遍歴をめぐる「奇遇」を語っているが，男色の描写は見られない。最後に，祈羽狄およびその妻妾を仙界につれていくのは「玉香仙子」という仙女である[67]。『桃花影』では，主人公が男に弄ばれる性行為を細かく描写せず，挿入するほうに重きを置く。にもかかわらず，『天縁奇遇』より，男性間の緊密な結びつきに目を向けている。『春灯鬧』は一歩進んで，挿入することおよび挿入されることの楽しさを一身に兼ねる主人公を創り出した。

おわりに

「肛門／肛門交」を意味する「後庭花」は，男女のどちらにおいても用いられる。さらに，男色と密接なつながりがある「後庭花」は，『金瓶梅』において，陳経済の例外を除いて，主に女性との性行為に用いられ，主人公の西門慶の性的嗜好を表わしている。「後庭花」の多様な使い方は，人物像の造形や物語の進展などにおいて独特の機能を果たしてきた。

西門慶は上流階層への接近のため，女の身代わりとして男色を利用する。性行為において西

---

[66] 前掲『春灯鬧』，第一回，240 頁。

[67] ［明］楚江僊隠石公纂輯，呉門翰史茂生評選『天縁奇遇』（中国古艶稀品叢刊，第四輯）420-421 頁。

門慶はいつも人に挿入する側におり，男色行為は彼の男性性を補強する役割を果たしている。一方，力（権力・性的能力）不足の陳経済は，社会の最下層に転落し，男に「後庭花」を攻められ，男性性が損なわれる。

明末の小説集『弁而釵』はこのような男色行為における権力関係を打破しようとする傾向を示している。きわめて大胆な性描写で名を馳せた『繡榻野史』では，インポテンツの主人公を補う者としてたくましい小者を登場させ，制限なしの性の饗宴を繰り返し描き出している。ここでは，「後庭花」がもたらす特権および汚名は取り消される。

『桃花影』，『春灯鬧』に至ると，男性主人公が男から挿入されることも描かれるようになる。男色行為において挿入されることは，主人公の女色遍歴の事業の一環のように描かれている。さらに，『春灯鬧』は従来の男色描写の枠を越えた性描写を描き出している。『春灯鬧』において，楚玉は女性を彷彿させる美少年と設定され，「不獨郎憐妾亦憐（郎君がかわいがるだけでなく，あたしもかわいがる）」と詠われるように，性別を問わず人目を引く[68]。少年の美しさに情欲の眼差しを向け，彼に女色を味わわせながら，彼が男色の対象にもされることで，書き手は多様性に富んだ性描写を追求している。

『桃花影』から『春灯鬧』にかけての男色描写は，男色行為に定着していた権力関係を打ち破り，新たな理想的な男性性を模索する姿勢を示している。とくに，『春灯鬧』は異なるジェンダーやセクシュアリティ間の自由な移行を可能にした主人公を造形している。この意図的に権力構造から距離を置こうとする，新たな性のヒーローの登場は，中国のポルノグラフィーの発展の経緯において特筆に値する事件ではなかったのだろうか。

管見の限り，「美人局」のエピソードは，清初以降の作品に継承されていない。清初以降，「後庭花」を攻める行為は，非正当な性行為と見なされ，文芸作品において批判の対象とされる傾向が見いだせる。清政府による伝統的なジェンダーイデオロギーを強化する政策に関連があると考えられる。一方，清代を貫いて，男色の文化は未曾有の発展を遂げた。とりわけ，京劇の「旦（女形）」が一世を風靡したことは，数多くの関連作品を生み出した。今後は『春灯鬧』に立脚して，清初以降における「後庭花」にまつわるディスコースの変容を検討してみたい。

（ちん　けいよう・中国文化論研究室）

[68] 前掲『春灯鬧』，第二回，266 頁。